



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | <翻訳> Cynewulf's Elene試訳（その一）  |
| Author(s)    | Cynewulf; 金山, 崇   |
| Citation     | 大阪外大英米研究, 9, p. 151-162   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/99016">https://hdl.handle.net/11094/99016</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## Cynewulf's Elene 試訳（その一）

金 山 崇

OE 詩の重要な写本の一つ、The Vercelli Book に収められた Cynewulf の傑作と称されるこの詩は、ローマ皇帝コンスタンチヌス一世が母 Helena に命じて、十字架を探し出す物語で、1,3 2 1 行に及ぶものである。今回は、この詩人の円熟ぶりを示すものとして名高い、フン族との戦い、エルサレム指しての船の旅の描写を含み、筋書としても一応切れ目となる処の、第 275 行（エルサレム到着のくだり）迄を訳した。

底本には Gradon 女史の Methuen 版を用い、G.P.Krapp のテキストと注、抜粋の収載された Funke & Jost, Moore & Knott に加えて 鈴木重威氏の読本を利用した。日本語訳は、知る限りでは皆無の様で、Gordon, Kennedy の著を参考にした。

語句等の解釈には問題点が多くあり、訳者の利用可能な資料、能力に限界があり、利用文献（Bosworth-Toller の大辞典も含めて）より思い切って、良いと信じる処に従い、取捨撰択をしたことをことわっておかなければならぬし、大方の御批判を願う処もある。

世を統べたまう神、諸王が榮光、  
信仰厚き人々の光明、眞ま人の姿  
借り、此の中なかが世に  
生まれ賜いてより、時の過ぎ行くに  
數と数えて二百と三、更に  
歴る年三十の星霜が流れたり。

時あたかも、コンスタンチヌス、  
軍の頭、ローマ人が王国にあり、  
全軍統ぶる位に昇りて  
その治世六年を迎えぬ。

10

勇武、科の木の楯持つこの庇護の主、  
葦下への恵み忘れず、君が王国  
天が下に栄えたり。彼、眞の王、

民が戦王なり。神、この王に  
榮誉、力數多備えて強く為し、  
為に彼、この中が世の津々浦々、

15

数多の民が喜びに、武器取り仇に当たるや  
数多の部族が悲しみとなりぬ。この君に戦、  
戦いの喧囂迫りぬ。軍勢集めたるは

フン族に、勝利のゴート族、  
尚武のフランク族にフーグの民、進軍す。  
豪の武者共、戦い控え意氣軒昂なり。

20

光るは槍、編みし帷子。  
彼等、鯨波の声挙げ、楯差し上げ、  
軍旗高く翳す。この時、勇士共が集い、

25

一族共に相寄りし様、ありありと見ゆ。  
大軍勢進撃し、森狼

出陣の歌高らかに、殺戮の近きを隠さず、  
露含む翼の鷲、敵軍が後方より  
高き歌声あぐ。時移さず

30

戦いに、軍勢の備え成し、町々を出で  
馳せ参じたるは最強の陣備え、これ  
フン族が王、その力もて、なべて近隣の

町々より武者、戦いに召し集めたるなり。

最強が軍勢進む、歩兵隊伍整え、

35

数多の隊列成して。やがて**外国**に至り

ドナウの河の岸辺、水逆巻く傍に、

槍の武者共、豪胆、

喧すしき群なして陣取つたり。

彼等、大軍もて押し寄せ、

40

ローマ人が**王國**侵し、掠奪せんとの意なり。

フン族來襲の報せ、町々の民に伝わりぬ。

その時帝、命下し

武者共に、猛き敵軍に向かい、

雨霰と矢注ぐ中、急ぎ戦場に赴け、

45

勇士共に、天が下攻めかけよと。

ローマの人々、勝者の名高き民、

その持つ軍勢、フン族が王に比し、

少なけれど、戦いへと武具の備え終えぬ。

彼等、名声高き王囲みて馬進む。

50

時に楯鳴り響き、戦いの木、斜し、王、

兵と共に、軍勢率い、戦場へ赴きたり。

わたり鴉空に声高く、黒き色、貧婪なる様。

軍勢進撃す。角笛の兵走り、

伝令大音声に呼ばわり、軍馬大地を踏み、

55

忽ちに大軍、争闘の場に集いぬ。

異国が民、フン族、勝利のゴート族が敵軍、

ローマ人が**國境**なるかの河辺に、その軍勢

無数の大軍、寄せ集めたる様

60

目のあたりにして、王

恐怖に戰けり。ローマ<sup>の人</sup>が王、  
心に悲しみ、多勢に無勢、  
勝利を期せず。優勢の敵  
向うに廻し、彼に戰える武者、  
頼む輩、豪雄の士、余りに少し。

65

敵の進軍見初めしより、  
侍大將等、君公囲みその辺り、  
河に近く、一夜の陣営をば張りぬ。  
その折り、睡るうち、勝利の名高き帝  
その輩のうちに臥すうち、自らの夢に現われ、  
目に映じしものあり。帝見たり、人の形  
成し、美し、白く輝ける或る者が姿、  
天が下、曾て目にせしこと無き  
類稀なるものと思ひぬ。帝、野猪の飾りの冑  
つけしまま、はと睡りより醒む。

70

帝に向かいその使者、美し栄光が御使い、  
直ちに言葉かけ、帝の名呼ばわりぬ。  
闇は霧消したり—。「コンスタンチヌよ、  
諸天使が王、運命が支配者、万軍の主

75

汝に固き約束成せと命ぜらる。例え  
夷狄の者、恐怖また假借無き戦いもて  
汝脅かすとも恐るるな。汝、  
天なる栄光を仰ぎ見よ。其處に汝、救いを  
勝利の徴を見ん。」と。帝直ちに  
聖き命に従わんとし——天使語り終えたり  
かの御使、誠の平和の使者命ぜし如く、  
面を上げぬ。帝が目に映りしは、

80

85

雲の屋根、その上に、輝く飾り施され、  
黄金鍍めし、美し、栄光が十字架の木。

90

宝玉燐きたり。輝く十字架に  
鮮やか、光り輝ける文字書かれいたるなり。

「此の証もて、汝、怖るべき危難に  
敵軍を圧服、憎き軍勢を阻み得ん。」と。

95

其の光る輝き、離れ、高きに昇り、  
かの御使と共に、聖き集いがうちへと  
向かいぬ。王、人々が君、此の  
有難き美景に遭い、歎びいやまさり、  
悲しみ、いよいよ晴るる心持したり。

.II.

そこで、君公等が庇護主、武者に  
環授くる人、軍勢の主コンスタンチヌス、  
栄光に輝く王、先に乃れに願われたる  
天上のかの御証に同じ御徵を、

100

キリストが十字架を、急ぎ  
造り成せ、と命じたり。

次いで帝、払暁、夜なお明けやらぬに、  
武者共を、戦心を眼覚めさせ、軍旗  
高く掲げ、聖なる木先頭に立て、神の御証  
持ち、敵が中へ進み入れ、と命じぬ。喇叭  
高らかに、大軍勢が前に鳴り響き、わたり鶴  
此の業に歎喜し、露含む翼の鶴  
此の動き、仮借無き戦を見守ったり。森が轟  
狼、その歌高く轟かしぬ。闘いが裸き襲い

105

110

来ぬ。兵等、矢の雨の洗礼受け初めしより、

楯、がっしとぶつかり合い、兵士

入り乱れ、肉弾激しく相衡ち、

軍勢数多、無残に死す。

命運尽きし者共へ、<sup>金色</sup>の楯越えて

数多矢の雨、また投槍を、

<sup>矢</sup>の蛇なる矢を、<sup>猛</sup>なる敵勢

強き掌より猛き勇士共がうちへと放ちたり。

115

堅き心の兵共進み、勢い激しくどうと寄せ、

楯の陣打ち崩したり。<sup>劍</sup>貫き通し、

勇悍、群成し押し寄せぬ。其の時、羽房

の軍旗、軍勢が前に上がり、勝闘は高く響きぬ。

<sup>金色</sup>の冑、槍、戦いの野に

120

燐然と輝きたり。夷狄は斃れぬ、

伏すは<sup>野</sup>猛なる無法の輩。フン族が軍勢

ローマ人が王、戦いがうちに、

聖なる木掲げよと命ずるや、彼等

忽ちに逃げ去ったり。勇士共、散り散りに、

125

或は戦闘に命奪われ、或は戦陣に

辛うじて命をよくし、或は半死半生

逃がれて峨々たる岩に拠り、身護り

一命免れ、また或はドナウの河の近き辺りに

滞り、或は其の流れに溺れ、

130

乃が最期みるに至りぬ。

かくて勇ましき軍勢、喜び

夜の明け染むるより日暮るるまで

逃ぐる夷狄を追い討ちす。とねりこの槍、

135

戦いの蛇飛び、かの軍勢、敵が楯の軍

140

打ち破られ、フン族が軍中、

其処より故国に逃り

着きし者、いと少し。

ときに全能の神、御自らの十字架により、

コンスタンチヌにて、その日の業にて

145

勝利を、光輝ある榮誉を、天が下の

王国を与え賜いし事明らかなり。

武士達が主公、戦勝の品に喜び胸躍らせ

出で発ちぬ——戦いは決せられたり——

勲功建てつ。武者達が護り主

150

配下の豪族率き連れ、武勲赫々の王、

楯音高らかに町々を訪れたり。

時に武者達が庇護主、いと賢き人々、

155

古の文書に智慧の力学び取り、

その心中に数々の人智備えし人々

早々集え、と命じたり。

その折り、國民の主公、勝利の王、

数多の人がうち、老若問わず、

「我が目にかくも明るく映じ、

かの美しき木もて我が民救い、

160

我に勝利を、敵を敗りて戦勝を与えし

かかる御証、光輝く御徵を示し賜いし」

神、如何なる御方にか、我に真を

語り得る者、言葉にて告げ得る者ありや、

と御館の主尋ねたり。

165

集える人がうち、誰一人

王の問い合わせに答える得、またかの勝利の御証  
につき、詳らかに述ぶるをしかと心得し者無し。

やがていと賢き人々、居並ぶ数多の  
人前に、口開き、それこそは天上の神が御証、  
またこれに疑い無し、と言い放ちぬ。

洗礼により御教を受けし人等、

これ聞き及び、その数少なけれど、  
帝の御前にて福音の徳述ぶる機会

得し事に、心明るく、魂は歓喜しぬ——

三位一体の栄光に崇められ、  
靈魂が護り主、諸王が誉れなる御方の  
生まれ賜いしことわりを、また  
神御自らの子、辛苦数々の責苦受け

人數多く集えるに、磔刑が座に

つけられ賜いしこと、かの夷狄の民等

攻め寄せし折り、帝が目の前に見せし姿  
に同じかの勝利の御証もて、人の子等を、  
苦惱する魂を惡魔の囚獄より解き放ち

彼等に恵み与え賜いしこと、また

人々が栄光なる御方、その墳墓より  
死より、三日目に、諸人が王甦り、  
昇天し賜いしことわりを——。

かくて此の人々、賢き言葉もて

戦勝に輝く主へ、靈魂が神秘につき種々、  
シルベステル聖人に教わりしまま語りぬ。  
人々の王、この聖人より洗礼受け、爾后、  
命有る限り、主の御為、教を守りたり。

170

175

180

185

190

扱て此の時、豪胆の王、環授くる人、  
大いに喜びたり。この人が心に新たなる  
喜び受けられぬ。天の護主

195

彼に無上の慰め、また無上の所願となりぬ。  
やがて聖靈が恵みにて帝、神の律令、  
昼夜分かたず、銳意世に知らしむる業起こし、

また、實に帝、人々を統べる身、  
戦の令名高く息むを知らぬ人、神に仕うる  
業に身を尽くしたり。やがてこの君公、  
國民の後楯、豪勇、果敢なり槍の人、  
学ある師等が助け得て、聖なる書のうち、

かの怨敵、その甘言もて誘い、  
民を、ユダヤが國民を、外道に誘い、  
果ては神を、万軍が主をも架につくる。

200

に至りじ時——かくて彼等ユダヤの民、  
屈辱がうちにその罰永遠に忍ぶ運命——

羨みと奸智にて、衆が喧騒のうち、何處にて  
天上の支配者、十字架の木につき賜いしか  
を知りぬ。これより、帝が心に、尊高き木  
をめぐりて、キリストを褒むる心持去らず。

210

その母に命じ、供奉の者連れ、  
旅路に出て、ユダヤ人が國訪れよ。

215

武者の供率い、栄光の木、  
貴き王が十字架、聖なる姿して  
大地が懷に隠され居る地、力尽して

求め行かれよと。エレネ、此の旅に  
遲疑見せず、國長、乃が自身の意の

220

頼み、侮らず、  
この女性、武者達、軍勢が  
護り主の命ぜし如く、  
時移さずその支度ととのえたり。

やがて武者多勢、急ぎ

225

海原へと向かいぬ。波の馬共、  
大海が岸辺にて、出帆に備えてあり、  
船の繋がれたる海馬等、海原に浮びいたり。  
かの女性、軍勢連れ、波頭立つ海へ

赴くや、彼女の旅立ちや人の目に明らかなり。

230

其処パンダルが海の岸辺に立つは、  
数多の意氣旺んなる人々。  
國境の道越え、軍勢次々と  
盛んに繰り出し、それより海馬等に

胴鎧、楯に槍、胴鎧の武者、

235

男に女、を積み込みぬ。

次いで彼等、海の化生棲む道越え、  
船縁高き舟艦、泡立ち走らす、大波  
越ゆる船縁、水波どうと襲う事幾そ度。

海原は咆えぬ。我未だ曾て聞かず、

240

女性の、潮の流れ、海の大道を  
斯くも見事なる軍勢率いて渡りし例しを。

この舟旅、目のあたりにせる人、

其処に舟、海路、波蹴立て、追風受け

滑るが如、満風帆に受け海馬

245

躍り戯れ、波の舟、渡り行く姿見るを得たり。

舳に環つたる舟、水の砦越え、

ギリシャ人が國の港へ辿り着くや、

毅き心の武者等歓喜し、

女王、旅路に欣喜しぬ。一行、舟を

250

岸辺が砂へ曳き上げ、懷かし波の館、

錨にしかと繋ぎ留め、戦士なる女王、

人々率い、再び東の道越えて、

これらの舟訪うまで、人々が運命を待たせぬ。

勇士、目にも鮮やかに纏えるは、

255

環繋ぎ合わす鎖帷子、更に

百戦錬磨の劍、豪奢なり甲冑、

面頬の兜數多、造りや見事

野猪飾りが冑。とねりこ槍が勇士等、

武者達、勝利の女王囲み旅立ちが支度ととのいぬ。

260

豪胆なり戦場の勇士等、帝の使介、

美々しき甲冑つけ、喜び勇み

ギリシャ人が國へと進み入る。

軍勢がうち、主公が賜物なる宝玉

嵌め込まれある様見えぬ。

265

喜びぬエレネ、心毫も臆せず、

主公が願い忘るる事無し、

自ら數多の戦場越え、百戦の

軍勢率い、ユダヤ人等を、

楯の武者共が國土を、兵士従え

270

訪わん、と心は勇みぬ。斯くてしばらく、

かの軍勢、豪の武者等、

類いなき大軍勢成し、  
槍の眷れ高き勇士等、気高き女王と共に、  
エルサレムが町へと着きにけり。

275

(未完) 1974. 9. 12

#### 主たる参考文献

P.O E. Gradon: *Cynewulf's Etene*, Methuen, 1966

---

R.W.Chambers & C.L. Wrenn: *Beowulf*, Cambridge, 1967

O.Funke & K.Jost: *An Old English Reader*, A.Francke, 1967

R.K.Gordon: *Anglo-Saxon Poetry*, Dent, 1964

C.W. Kennedy: *Early English Christian Poetry*, NY Oxford UP, 1968

C.W.Kennedy: *The Poems of Cynewulf*, Peter Smith, 1949

G.P.Krapp: *The Vercelli Book*, Columbia UP. 1961

F.Klaeber: *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, G.C.Heath & Co.,  
1950

S.Moore & T.A.Knott: *The Elements of Old English*, G.Wahr, 1969

S.Suzuki: *Old English Poetry Religious Poetry*, Kenkyusha, 1972